2018.10.1

○○中学校　第1学年　　社会科通信

なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

No.31

卑弥呼の時代の食事を考える ── 米は貴重品だった

卑弥呼は、景初3年(239年)に難升米を魏に使いとして送った(前回の「なんでやねん」で紹介した「魏志倭人伝」の「原文」では景初2年(238年)と記されているが、今日の研究では景初3年(239年)の誤りだとされている)。

さて、卑弥呼が生きていた時代(弥生時代)には、稲作は倭国に定着していたと考えられるが、はたして人々は、米を主食にできたのだろうか。少し考えてみよう。

「魏志倭人伝」では、倭人は「禾稲」を植えると記している。禾はイネの意味もあるが、「禾稲」と連記しているので、イネ・アワ・ムギなどの禾のある穀物全般を意味すると思われる。ちなみに、後の奈良時代でも、イネとアワが主要穀物であった。

奈良県立橿原考古学研究所の発表(2012年)によれば、奈良県御所市秋津・中西両遺跡から、弥生時代前期(約2400年前)の約25,000㎡の水田跡が発掘された。東京ドーム約2倍の土地に、約2千枚の田が整然と区画されていた。1枚の田の面積は3m×4mで、畳6枚程度の広さだった。しかし、当時の土木技術から考えるととうてい米だけで暮らせる収穫量にはならなかった。必然的に雑穀やクリ・シイ・トチの実などの堅果類、サトイモで、不足する米・アワを補ったと考えられる[*1]。

ちなみに、1981年に寺沢薫・知子夫妻は、弥生時代遺跡から出土した植物遺存体を調べて報告した。その報告によると、最も多かったのはドングリである。イネは第2位であり、以下モモ、マメ類、ヒョウタン類、クルミ、クリ、ムギ類、タデ類、マクワウリ、トチノキ、ブドウ類の順だという[*2]。稲作が始まっても、依然としてドングリ類に頼る食事だったのだ。このように弥生時代の食料事情を考えると、「稲穂」を税として取る、弥生時代の税はかなり過酷なものであったように思える。

次に、卑弥呼の時代(弥生時代)の主な食材を見てみよう[*3]。

主食 … ドングリ類・米・アワの粥(甑で蒸した強飯だとする説もある)。

副食 … 魚介類(アワビ・サザエ・ハマグリ・タイ・サバ・アジ・イワシ・コイ・フナ・ウグイなど)、海藻(ワカメ・アラメなど)、蔬菜類(ダイコン・カブラ・サトイモ・キュウリ・マクワウリ・冬瓜他ウリ類など)、果物類・堅果類(モモ・カキ・ウメ・スモモ・ビワ・ナシ・クルミ・クリ・アケビ・トチの実・ドングリ類など)、鳥獣肉(シカ・イノシシ・ウサギ・カモシカ・イヌ(縄文人はイヌを食べなかったが、弥生人はイヌを食べた))など。

酒類 … 噛み酒。サルナシ・ニワトコなどの実から果実酒も作った(縄文文化)。

---

*1　廣野卓『卑弥呼は何を食べていたか』新潮文庫 2012年 p.18。
　　同旨、土肥鑑高『米の日本史』雄山閣出版 2001年 p.34。
*2　石川日出志『農耕社会の成立』岩波新書 2010年 p.70。
*3　前掲、廣野卓『卑弥呼は何を食べていたか』pp.44-48による。

纒向で卑弥呼時代の種

年代測定135～230年の可能性

畿内説さらに強まる

邪馬台国の最有力候補地とされる纒向遺跡（奈良県桜井市）の中心的施設跡で出土した大量のモモの種について、放射性炭素（C14）年代測定で「西暦135～230年の間に実った可能性が高い」との分析結果が出た。遺跡は邪馬台国より後の4世紀以降とする異論もあるが、卑弥呼（248年ごろ没）の活動時期と年代が重なる今回の分析は、遺跡が邪馬台国の重要拠点だったとする「畿内説」を強める画期的な研究成果といえる。

【矢追健介、藤原弘】

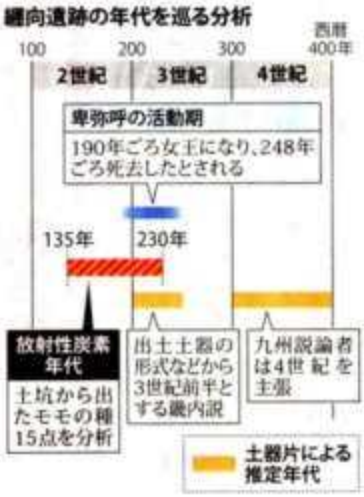
発掘を担当する同市纒向学研究センターが14日に公表した研究紀要に掲載された。C14年代測定は、動植物の遺骸に含まれ、時間とともに減少する「炭素14」を利用した年代特定方法。考古学研究などで広く利用されており、同センターが2015年以降、モモの種などの測定を国内の2機関に別々に依頼した。

測定したのは、09年に見つかった大型建物跡脇の穴「土坑」から出土し、建物解体時に祭祀に用いられたとみられるモモの種など。約2800個の種のうち15点を中村俊夫・名古屋大名誉教授（年代分析学）が分析した。測定できなかった3点を除き、結果は同じ年代に集中。230年までの約100年間に実り、ほぼ同じ年に穴に捨てられた可能性があるという。

また、徳島県埋蔵文化財センター専門研究員（分析当時）の近藤玲氏を通して、山形大の高感度加速器質量分析センターが行った種や土器付着物の分析でもほぼ同様の結果が出た。ただ、現在の測定条件では、年代幅をさらに狭めるのは不可能だという。

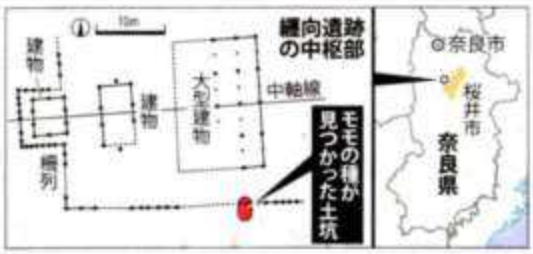
土器形式の変化で年代を推定する「土器編年」から、纒向遺跡は3世紀初頭に突如出現したとする説が有力だ。一方、邪馬台国を北部九州に位置づける論者は土器編年を疑問視し、「纒向は4世紀以降の遺跡で、邪馬台国とは関係ない」などと異論を唱えていた。

纒向学研究センターの寺澤薫所長は「土器編年による年代推定とも重なっている極めて重要な資料だ。纒向遺跡は3世紀中頃に収まる遺跡だということを示しており、（卑弥呼について記した）魏志倭人伝の記事と重なる」と話した。



所在地論争終息間近

解説　今回の放射性炭素年代測定と、従来の考古学の基礎研究で得られた成果を合わせると、纒向遺跡の大型建物群は西暦230年までの20～30年の間にあったと絞られそうだ。邪馬台国の「畿内説」をより強める成果で、近畿か九州かという所在地論争は終息に近づいていると言っていい。



中国の魏志倭人伝と後漢書東夷伝は、2世紀後半に倭国が乱れ、「邪馬台国」の「鬼道」を行った女王卑弥呼が「共立」されて「倭王」となり、戦いが収まったことを記す。

さらに3世紀半ば以降、「前方後円」という特異な形の墓が近畿を中心に、東北から九州まで徐々に築かれる。同じような墓を共有するのは、政治体系や共通の文化が成立した証拠であり、邪馬台国から発展したヤマト王権を核に初期段階の「国家」が成立したと考える根拠になっている。今回の測定結果も一連の説に合致するものだ。

一方、2世紀以前は北部九州が政治、文化的に優位で、独自性の強い墓を築き、吉野ケ里遺跡（佐賀県）のような巨大集落を造営した。近畿地方が隆盛した3世紀以降、北部九州の勢力がどう歩んだかは、今なお重要な研究テーマだ。

科学の限界に迫った今回の成果を基に、当時の政治や社会、文化のあり方にどう迫れるか。歴史・考古学研究でのさらなる努力が求められている。

【山成孝治】

纒向遺跡から出土した大量のモモの種＝微島健太郎撮影

放射性炭素年代測定

炭素原子には質量数が異なる炭素12、炭素13、炭素14（C14）の3種類がある。このうちC14だけが時間とともに窒素に変わる特徴を利用し、動植物の死んだ年代を調べる方法。生きている間は常に外界から炭素を取り入れるため体内の濃度は変わらないが、死ぬと一定の割合で減り始め、約5700年で半減する。実年代を出すために、年代が分かっている樹木の年輪を使った年代換算データベースで補正する。

資料出所：毎日新聞
2018(平成30)年5月14日(月)夕刊より
ただし、「なんでやねん」に紹介するにあたり、倉橋が記事のレイアウトを編集加工し、一部の写真を削除した。